

トマトホモプシス茎枯病防除に向けた取り組み



写真1 茎の褐変（上：発病茎、下：健全茎）

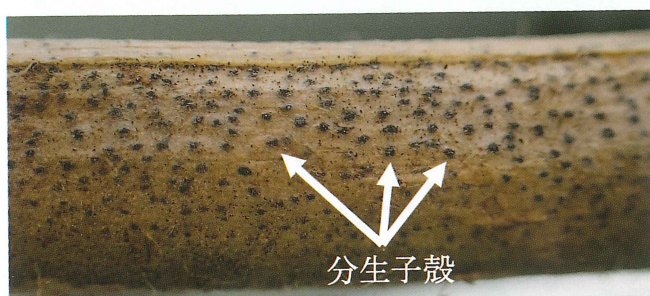


写真2 茎褐変部上の分生子殻（黒い斑点）



写真3 分生子殻断面の顕微鏡写真

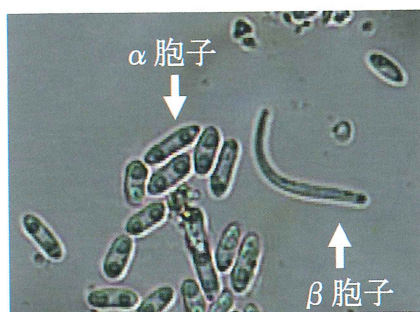


写真4 α 胞子（楕円型）および β 胞子（かぎ針型）

表1 病原菌の乾熱処理時間と菌糸の死滅

処理温度	処理時間(時間)					
	3	6	12	24	48	72
50℃	10	0	0	0	0	0
45℃	100	80	65	0	0	0
40℃	100	100	100	100	100	100
35℃	100	100	100	100	100	100

※各処理後に生死を判定し、試験に用いた4菌株の平均生存率(%)を算出した。

トマトホモプシス茎枯病は、*Phomopsis* 属菌という糸状菌(カビ)によって引き起こされる病気です。本菌に感染したトマトは、茎が褐変し(写真1)、やがて株全体が萎ちよう、枯死します。茎の褐変は、摘葉や収穫時に残った葉柄や果柄から発生し、その後主枝へと拡大していきます。茎の褐変部には、小黑点状の分生子殻を形成します(写真2、3)。分生子殻中には、多数の胞子が形成されます(写真4)。本病は、3月頃から発生し始め、5月から6月の温度、湿度が高い時期に多発する傾向にあります。

Phomopsis 属菌による病害には、かん

きつ黒点病、アスパラガス茎枯病、ナス褐紋病などが知られていますが、本病原菌は、既報の *Phomopsis* 属菌とは種が異なることが明らかとなっています。

当センターでは、これまでに本病原菌の病原性、死滅温度を調査しました。その結果、本病原菌は、ナスおよびピーマンに対して病原性があり、45℃で24時間、50℃で6時間以上の乾熱処理で死滅することが明らかになりました(表1)。

今後は、有効薬剤の探索などに取り組み、有効な防除対策を明らかにしていく予定です。

(病理担当 山崎淳紀 088-863-4915)